寸

的

特

同

座

同

財

同

餐

講 は カン 何

教願寺

岡西法英

志を出し合う慣例であっ際には〈念仏のすすめもを設けたことに始まると 日二十五 よ門 同朋 源は宗祖 っ徒 たことに始まるとい 7 衆 同行 日に 作の が聖人の師 揆 のすすめも 寄り合 た真 致 宗 寸 集い念仏 教 <u>0</u> 結 然聖人 寸 とい \mathcal{O} 連 基 . で る。 帯 パのご命時、関東 \mathcal{O} 盤 0 決起) てそ 悉の会 組

そ地人のの行の域の時定わ 傷 勤 本 行 をし、 户) ることを目 は (御講: 型の は 蓮 是如上 話、 二十五 \mathcal{O} が 品、談合が続く 本願寺住職の 仏 聞 寄り合 が 上 入以 法 徴 講 を安置 組織 日と二十八日 \mathcal{O} 的とし、定期的 うべ 基本 降のこと い日であ であると同 き本・ \mathcal{O} である。 V 山本 息の であ 0 わ 同 (親 ば ・願寺を な 朗 で 読 集 正 聖 が信

2019年

(令和元年) 5月7日

念仏のこころに生きる生活

净土真宗本願寺派 高岡教区 五位組 題字・織田隆夫 ③ 間 に 食 身 坊

主・

員

全員

じ

「お斎」

 \mathcal{O}

平を

が同ば講銭

ず

同

額の

けてきたのは門徒衆の連帯でたものであるし、織豊政権も海たものであるし、織豊政権も海が点として、門徒衆の一摸によくの真宗の〈御坊〉は自分たせ と見 であ 拠点として、門徒衆への真宗の〈御坊〉※武装蜂起だけが ベ つて、 なければならない。一つ一 であるし、織豊政権も: 地 地元門徒衆の一揆の産物であるいた、その全体が「一揆」であったいのは門徒衆の一摸によって出来いの〈御坊〉は自分たちの集いのが、その全体が「一揆」であったのは門徒衆の一摸によって出来がの〈御坊〉は自分たちの集いのなりにない、一次によって出来がの〈御坊〉は自分だちの集いのなりにいい。 っし、も、 、門徒衆の一摸ここ、 、維坊〉は自分たちの集. ・ ね坊〉は自分たちの集. を示この すもの は である。 11 わ ば

織

に 組織とし ての 特徴 を列 記 す

ことは

言うをまたな

る。 スすが. 1目的 今も 門徒

金 で

た

伝

統

かった、かった

永宗

い門

が財

 \mathcal{O}

主

金

いった。

4盤3あ源に21 形 家 組寺 が織檀 る 仏で 制 9 新世 壇あ度 しの い村 を 以 9 中心た地域 す庶民講 前 に の枠に社会 域 を 成 ち旧来 精神紐 網 L <u>\(\frac{1}{2} \)</u> 組旧 7 羅 L 存的 みを 7 行立し、宗門 み帯 \mathcal{O} 中出 越 とし え た す \mathcal{O} た権基で如 基

> ⑤ わ 地 れ域 力となったと

う 三

る。

座

分上

 \mathcal{O}

寺をを表するみの 統。 いの川う寺幕 寺請、 そこでは 関 の講という へ によらず 義 真宗の 係 け 制度によって固定され ľ ょ るキ ょ は 僧侶 特 ŋ 徴。 ・リスタ 射 画 聴聞は 門徒 法要儀 で支えてきたの対ぐるみ地域の ン禁制 は役割 講に 式 よる 叫衰ば退 葬 \mathcal{O} は 違 儀 とめ れのっ伝はのぐ

ŋ る 教 続 育広拝 が といを講

凹の現状も体力ができる。講は小 なら 5 に \mathcal{O} り ないそ 小 目 面 さ講か さ

十五日講

窪谷国雄

りにつき大きな声に目を覚ほどでした。いつの間にか眠の参拝者で身動き出来ない 頃 大きな呼び声でした。 ダブツ。浄土から届いてきた お参りし、お御堂いっぱい 親に連れられたお寺 冏 ナンマンダブツ。 弥 陀

う を願つております。 々の先輩方々が立 五位組 配 (数も減少気味で です。講の世話 十五五 杯のお参 日 く頃のよ ち上 講 ŋ



二十五日講 ~初御講~ 3月26日 石堤 法善寺

平等講

自纺绍

介

敬

亥山

我照寺

高

岡

市

福 岡

町 山 岸

吉田克行

す。な声が聞こえてくるようで とこの道に入って来たかー。 ていかれました。「お前 方もこの「お講」で仏教を聞 達はここにいるぞー。」と、そん えてきたのが「お講 仏 のなかで、 教を 地 域 私たちの先人 で はもやつ ŋ

講員 をお願い致します。 拝をお願いします。皆様方、 た時は、お友達を誘ってお参 か。どうか皆様、お講が始まつ になる事はもうないのでしょう 昔の様に御堂が人でいっぱい の方々のご理解とご協



~報恩講~ 平等講 3月25日 ・ 本保 本正寺

だのが始まりと言われていま卯ノ花谷山中に草庵を結んす)と名乗り、一四六五年に 不詳)が、法名を敬砺波郡土屋村の住 後ろの山にあり、現在 記念碑が建立されておりま があったと思われる場所 主は敬琢と号していました。 す。当初は真言宗で代々の庵 山号の由来となっておりま ノ花谷山中」とは当寺の 寺の始まり 琢

> 帰依, その と改名して、一五二一年に 本願寺継承 人(一四五 (う) こ、一五二一年に土節に法名を敬琢から宗傳 して浄土真宗に改宗し、寺継承は一四八九年)に 5 一五二五五五 九世

ながら今日に至っております。 そして、この頃から浄土真宗の 事中に本堂内陣柱の古い漆を 陣塗箔修復が行われ、その 記念法要が勤 法要並びに珉照寺開基三百 寺院としての活動を本格化 たことが明らかとなりました。 のことから、一六六七年に現 為す」の文字が現れました。こ 削り落としました。その時 寛文七年(一六六七)基建 門信徒の皆様に支えら 地に寺院の基が建立され 九八〇 /御誕 れ、爾来三百 年、当寺にお 修された際に 生八百年慶 1

主講催師

平等講·二十五

一日講

未定

懇親会あり、バスの送迎あります。場所 舞谷 こぶし荘

時

報助降初恩成誕御

十月二十五日 六月二十五日 十月二十五日

日

珉 性 西 法 照 宗 光 善 寺 寺 寺

日

日日

会会講

両

内**講合同夏期講座**

お講の年間日程

平等講

座 (十四時~)

助本降本報初成山恩 山誕講講講講 八 六月二十五日八 六月二十五日十 五日 西廣永本教福済念正願寺寺寺寺

日 善教·

堂 経 法 案 内 座 祠

(九時半~ 十三時半~)||日講

各寺院の祠堂経法座の日程をお知らせします。※日程は変更になる場合があります。

秋の報恩講の際にお勤めします四日市 浄明寺

法話 射水市市井 公文名 真体的一个月二十二日朝九時三十分昼一時三十分上向田 净永寺

各寺院にお斎等のが

にお問い合わせくだの詳細については

合わせください

三月十九日朝,三月十七日昼, 法話 高岡· 尚市伏木 山名 一日期 九時三十分 昼日期 九時三十分 昼日 日 日 一時三十分 昼日 日 日 一時三十分 一一時三十分 徳 師

法話。高岡市内島。 岡西一法英人一六月四日朝,九時三十分昼、二時六月三日朝、九時三十分昼、二時年日, 広済寺

 本保
 本正寺

 五月十九日
 朝

 一本正寺
 中

 秋知 仁史 九時三十分 昼二 仁史

法話。富山市水橋。 石川 了英年的六月十三日朝,九時三十分昼,一時三十分六月十二日昼,二時 法話 高岡市戸 七月九日 昼 二時七月九日 昼 二時

師

立野 永念寺 八月三日朝,九時三十分 昼 田

法 八 八 **山** 話 月 月 **岸** 而有一场市城端 一样谷子二十三日朝,十一時星,二时月二十二日星,二十三十分 珉照寺 昼 二時三十 分

杉谷 淳志 師

石堤 長光寺 七月二日 朝 九時 七月二日 朝 九時 時三十二 昼 昼 西 **良夫 師** 一時三十二 分 分

法話福岡町大野 女工月六日朝,九時三十分 一時三

法七**辻** 話月七 石川県加賀市 日朝 十時 日 西福 昼 時三十分 日下 賢裕

師

高岡市戸出六十歩-日 昼 二時 林 要昭 師

 山岸
 珉照

五時三十分

七月三十

明 座 案 内

各寺院の黎明講座の日程を お知らせします。

内島 八月十三日 八月十三日 **教**

朝朝朝 六六六時時

※一回あたり千円での受講もできます

合掌

二月二日(日) 10110年(令和二年)

十五時

教願

八月二日日

五時三十八 分分

五月六日七月二日十月六日

(日) **目 目** 月

廣済寺

十七時 十六時

光明寺 性宗寺

7

 八月一日
 朝
 五時三十分

五位組

四月七日

(日)

十五

西光寺

研修会日程(日

•時間•場

十六寺

浄明寺

総会

七月三十一日

五時三十分

行事予定

蓮門会

これらのことは、新しいみ教 本山にも参拝しています。

テーマ「蓮如上人のことば

岡西

法英

三日市 光源寺

日程

場所 未定 善教寺

歴史講座

場所 日程 七月十日(水)午後 赤丸 性宗寺

小矢部市西中

津 Ш

玄 亮 師

第二十一回五位組

夏休み子ども大会

編

年中行事を聞法し、時にはなりました。講費を納め、 られて、 ういうお参りがあると教え '。 て 私 親戚の叔父さんからこ から十数年になりは、お講に出させて 世話をするように

あります。近頃は、お講の年(嘉永三年)で長い歴史が 総会資料では講員 発足年次は、二十五日講 五位組資料では、お講えの出会いであります。 年)、 平等講が一八五〇 くなってきています。 七六〇年(宝曆一 が少な

され 活動が必要と感じます。わかりやすく普及してい 続されており、お講に発布 愛山 御同朋御同行精神によっ た御消息の御趣旨 護法の御法義が相

五位組だより 第18号 2019年(令和元年)5月7日発行

発行所 五位組組長事務所 (土屋 珉照寺内) / 編集・制作 五位組門徒推進員協議会

集

記